慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	対馬の石
Sub Title	A study of stone worship in Tsushima
Author	井口, 樹生(Iguchi, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1988
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.53, (1988. 7) ,p.45- 66
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00530001-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

対馬の石

井口樹生

昭和六十一年度特別研究休暇を申請するに際して、慶応義塾大学に「研究課題」として、つぎの二つを提出した。

一、折口信夫「神道概論」「国語史」の講義を、池田彌三郎のノートによって整理し、原稿を作成すること。

二、島山の採訪

一は、折口信夫生誕百年を記念し、「折口信夫全集ノート編追補」第一巻『神道概論』、第二巻『言語伝承論』として、中央公論社から出版することを得た。

二は、池田彌三郎先生の遺稿「海神山神論」(未完)に触発されて、佐渡が島、瀬戸内の島々などを採訪したが、五月に壱岐および対馬を採訪した。この報告はその時の採集をもととし、六十二年十一月二十八日慶応義塾大学国文学研究会で発表したものである。

一　寄り石・寄り神

特別研究休暇中に計八回、十か所ほどの採集旅行に出かけたが、六十一年五月十五日から二十三日まで、壱岐・対馬を採訪した。採訪するにあたって、予め調査の対象を何にするかを考えてみたが、あまりに広範囲にわたって民俗資料があり、初めての採訪にこれだと焦点を絞ることは不適当である。それで、現地に渡って、まず実地を見聞することにした。

そこで気が付いたことは、壱岐や対馬では小さな祠に石を祀ってあることが非常に多いということであった。これは本土ではあまり見かけないことで、奇異にも感じたし、ここにもある、ここにもあるという刺激をまず感じたわけである。

最初に出会ったのは、壱岐の筒城仲触にある白沙八幡宮で、ここは海神社とも呼ばれている。海神社の背後にある山を海神山といっているが、素直な名付け方で、海の神の山ということである。本社は応神天皇などの他、海神豊玉彦命が祀られているが、この背後に高さ七十センチほどの石の小さな祠が二つある。その一つの扉に、英語の「L」というような文字が書いてあって、それに「魂」という字と、「命」という字が書いてある。「L魂命」あるいは「乙魂命」かもしれない。漢字の方ではインとかオンとかいって、隠れるとか、隠すとかの意とあるが、あるいはこの字でもって釣針のことを意味しているのか、あるいは勾玉みたいなことをいおうとしているのか、そんな祠があった。背面に文政元年の年号が刻まれていて、扉を開いてみると、御幣の背後に、直径二十センチほどの円形の石が一つ置いてある。そういう形式の石をたくさんみることになった。

諸吉南触の八幡浦は海部の部落であるが、寄八幡という神社がある。神体は、文中二年に海から上がった大きな石であるといわれているが、その本体自身は神社の下の方になっていて、今は見ることが出来ない。ここも小さな祠がたくさんあって、恵美須の祠などに並んでやはり円形の石を祠っている。

諸吉仲触の高御祖神社は、祭神は高皇産霊尊などであって、壱岐の県主が、月神を祀った社だと伝えている。背後にやはり小さな祠があって、中はここでも丸い石である。

また箱崎釘の尾触の、箱崎八幡は月読神社ともいって、壱岐の県主の祖先神とも伝えている。その本殿の祭神は見ることが出来ないが、背後の摂社に行くと、中にはやはり丸い石が祀ってある。ここのは紙で作った貫頭衣、つまり頭からすっぽり被るようなもので覆われていた。この他にもたくさんあったが、ここにもある、ここにもあるとなると、普通のことだということになって、だんだん写真を撮るのも省いていくことになった。人に祀られた石が、壱岐においては、摂社だとか末社だとか、小さな祠に祀ってあったが、対馬にいくと、祭神それ自身が石であるというところが多くなってくる。

対馬の厳原町の安神に木根神社という社がある。木根神社は、貞享三年(一六八六)に作られた『対州神社誌』によると、

神躰并社無之。由緒不知。

とある。『対州神社誌』は対馬の村々の報告を元にして、加納幸之介という人がまとめた本で、要するに神道神学によって整備されたものではなく、村のそのままの報告があがってきている、そういう意味で非常に貴重な本といえる。ま

た寛政六年(一七九四)に、この社が初めて出来たらしいことが、神社を造った大工の札が保管されていて、それの一番古いのによると、だいたいその頃であったことが分かる。この社を氏子代表の平間善次郎氏(六十二歳)に開いてもらったが、何の変哲もない丸い石がお祀りしてあった(写真1)。平間氏の話でも、本社はもと社はなく、ただ石が置いてあっただけであるということであった。もともとは神体は、露出した直径二十センチほどの丸い石だったわけである。

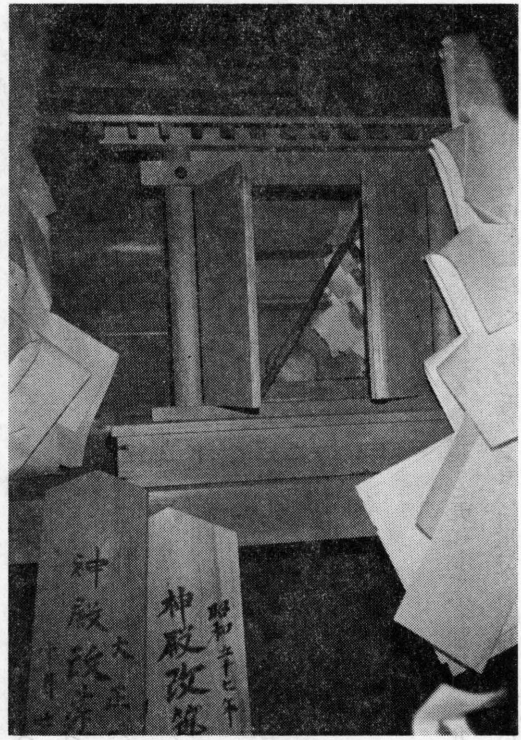

写真1

これがたとえば、上対馬町の芦見の天道神社になると、――これは『神社誌』には天道地と書いてあるところであるが、この天道地というところが対馬には多数ある――ただ普通の丸石を三つ重ねたそれだけのものが露出している。それが神であって、それを拝んでいる。

あるいは同じ上対馬町の泉には、イズミドンという場所がある。このドンは「さん」だろうから、要するに泉の発祥の地と思うが、そこの杜は伐ってはいけないと言われている。尋ねてみると、大きな木の根本のところに、やはり石を積み上げてあって、そこで泉の人たちが拝んでいる。拝んでいることは御幣や酒や供え物などがあるので、そうした拝

所を拝む信仰が続いていることが分かる。

そうした信仰を採集して、『対州神社誌』を見ると、「御神体石」という記事がたくさんあることに気が付く。そういう土地なんだ、そういう島なんだということが印象づけられたわけである。すると、こういう信仰の対象になる石を誰がどのように祀るのかが次の問題になる。個々によって色々な習俗の違いはあるかも知れないが、私が短い間で採集したことだけを述べることにする。

厳原町の豆酸瀬に妙躰神社がある。行政的に厳原町といっているが、対馬の南半分はみな厳原町であって、われわれが東京でいう町とは余程違う。一つ一つの村落は皆孤立している。現在対馬というところは、真ん中に背骨みたいに道路が南北に通って、そこから一つ一つが枝になって、一つ一つの部落に下りて行くわけで、隣接していても部落から部落へ直接には行けない。したがって、この幹線道路がなかった時代には海路を頼るしかない。それで特に女の人は一生その生まれた部落で育ち、嫁ぎ、死んでゆくというのが普通であったようである。

たとえば阿連というところの老婆などは、鋏奨つけ祝いの時に、加志という隣の村落に初めて山を越えて太祝詞言神社に拝みに行った。その時に自分の村落以外の男に初めてひやかされて、恥ずかしかったけれど嬉しかった。それがたった一つのいい思い出だと言っていた。それで終わってしまうという人生である。男は船でもって磯づたいに行かれるから、いくらかは知っているが、女の人は本当に狭い世界であったことが分かる。

豆酸瀬の妙躰神社は、宝暦十年(一七五一)に藤斎長が作った『対馬国大小神社帳』によると「祭神豊玉姫」などと書いてある。だいたい藤(藤原氏)の人たちが入ってから、だんだん中央の神道に照合して対馬の土俗の信仰が解釈、整理せられていったのである。それ以前は、「御神体石」というようなもので、この時代になると、「祭神豊玉姫」というよ

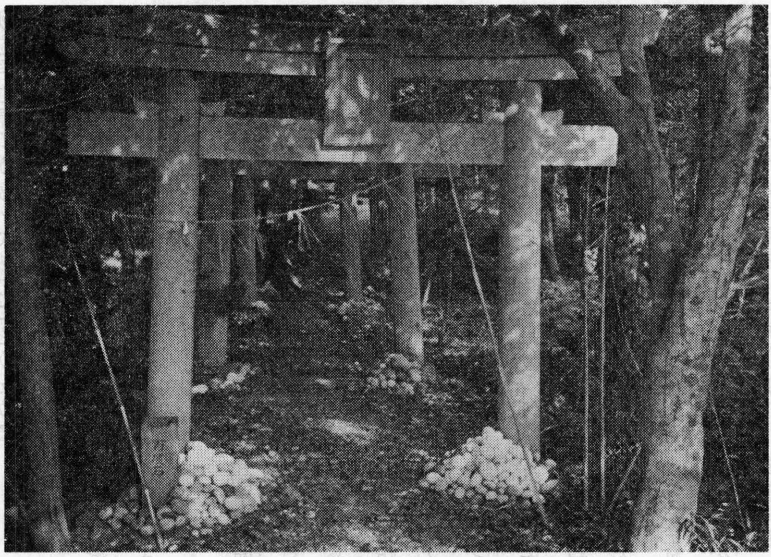

写真2

うに習合が行われたと考えられるのである。そして、この時代からだんだん「対馬神道」ということばが出て来るのである。

妙躰神社には寄進された鳥居がたくさんあった。ということは、大きな願い事がある時、鳥居を寄進することが現に行われているということだが、この鳥居の根本に直径十センチほどの丸い白い石が積み上げられていた(写真2)。近くで農作業をしていた人に聞くと、この石はお参りする人が持って来る。中でも体の悪い人が持って来て、その石を社前にお供えするのだと言う。その丸い石をマサゴといって、海に行って、新しく寄って来た石を持って来ないと効き目がない。つまり、すでに鳥居のもとにあるのを拾って、もう一度お供えしても効き目がない。海に行って、打ち寄せられた、なるたけ新しいのを拾って来て、それを社前にあげると効き目がある、という話であった。

これでわかることは、対馬では特別な巫女とか、神憑りする人ではなく、ごく普通の、一般の人が、石に寄り付く霊力

というようなものを、まだ信じている。それが根底となって、参詣に寄り石を持参するということが行われている。石を運んで来る人がいまだに、それもかなり多数で、豆酸瀬の人たちばかりでなく対馬の各地から、妙躰神社に石を持ってお参りに来るということである。

二　石を斎くもの

この通常の人の石に対する信仰が、次に、ある特定の人に斎かれる石という段階にもなってくるのだろうと思う。美津島町高浜には矢房神社がある。この神社の背後にかなり大きな祠があって、その御神体は高さ一メートルほどの円筒形の白い石であった。近所の女の人に聞いたところでは、この石は寺田さん一人が祀っている。寺田さんは女の人だが毎朝お祭りしている。この神様は女の神で、シマ様という。年二回大きな祭礼があって大勢の人が集まるが、高浜の人は氏神ではないから参加しない。シマ様を信じている人たちが祀っているので、だから自分はどういう祭りかは知らない。神社の背後にある藪は伐ってはいけない、伐ると祟りがあるという話であった。

つまり何か特定の石を祀っている女性がいて、地縁、氏子関係ではなく、その女の人に信者がついている、そういう形で石が祀られている例と思われる。もっと調べれば色々なところでこのような話が聞けると思う。

こういう関係がもう少し歴史的になって、氏子というか、地域の人たちが信仰の中心になっていっている例もある。上対馬町の琴というところ、これは昔は「キン」と読んだらしいが、今は「コト」と言っている。そこに琴崎明神という神社がある。琴の村落で、小島謙二氏という八十歳の老人から話を聞いたが、この老人は、琴崎明神を拾い上げたという乙女（とめ）という人の子孫だとのことだった。乙女は命婦だともいっているが、対馬では、平安朝の『源氏物語』などに

出て来る命婦ということばが、いまだに使われている。命婦舞を伝承している仁位の国分氏などもあり、あるいは、特別に神が憑くような女の人のことを命婦と呼んでいる例もある。

小島謙二氏の話は、非常に古風な話であった。旧暦三月三日が琴崎明神の祭礼の日である。この日は潮が干る。昔、琴崎のとっぱなの磯のところで、女たちが三月三日に貝などを拾っていた。そうしたら海の向こうから波が立って来て、その波が黄金に輝いた。で、他の女たちは皆逃げてしまったが、乙女一人だけがショウケを持って、こんなふうに言った。「上がって来られたか。もし神様ならこのショウケに乗って下さい」と頼んだ。すると神様が乗ってくれた。ところがそれを持ち上げようと思うと重くてどうしても持ち上がらない、そこでこんなふうに言った。「もし神様だったら軽くなって下さい」。そう言ったら軽くなった。それで乙女は神様を持つことが出来、背負って、「あなたの鎮まりたいところに私を導いて下さい」と言って、導かれる儘に山に登って行った。このような話である。で、今の社は昭和になってから移したので今の社の下にこびろいところがあるが、それが元の社だということ、旧暦三月三日に祭りを行なって来たので、それが神様の上がった日であり、そのためそれから女はこの磯にははいらない。ただ三月一日、二日には磯に行き、お祭りをするためのご馳走を作るトコブシなどを取る。三日ははいってはいけない。はいるとよくないことが起こる。常の日にも女がこの磯海にはいると海が荒れるので、女ははいらないことになっている。三日には村中の全員が琴崎明神に集まってお祭りをする。弁当を持参して集まる。後になって神主が一人いたことがあったが、今はいない。今の話は百何十年も昔の話である。四日には乙女のお祭りを村中でしている。弁当を持ちよってこの家に集まる。今日でも、三月四日には村から酒二升がとどけられる。乙女を祀った所がこの庭にあるというのである。

小さな社のようなものがあって、その後に石があった。祠と言っているのか、なんと言っているのかわからなかっ

たが、お墓ですかと聞けば、お墓みたいなものだということも言う。それでは墓ですかと確かめると、そこのところは避けるようであった。屋敷の中に墓があるというのはいいことではないのではばかるのだろうと思うが、そのような答であった。

この琴崎大明神を『対州神社誌』は、次のように記している。

神躰は古来より見申たる者無之候。三尺九寸ニ二尺三寸之小御所有之。此内に高サ壱尺四寸ニ指渡壱尺弐寸の曲物有。神躰此内ニ在。

神体は誰も見た者がいないと言っている。『大小神社帳』には、先に述べたように少し解釈が加わって、「祭神海神」というふうに書いてある。『対馬州神社大帳』という――先程の『大小神社帳』を書いた斎長の子の藤仲郷という人が、天明年間に書いたもので、この書物などが網羅的に対馬固有の信仰を、日本の神道に習合していった集大成であるが――それによると、

祭神表津少童命、中津少童命、底津少童命。又云磯良。神體鏡一面。古神體也。後金砂粉之塊有四五丸。如大石之摧。指渡壱尺曲物ニ入。為神體也。

とある。砂金の固まりのような物を考えているようで、それがあると言っているわけだが、果して本当なのかどうか。厳原の殿様に仕えた藤某が現地に行って採集したかどうかは怪しいところである。もう少し後の安政六年(一八五九)に、『楽郊紀聞』という中川延良(号、楽郊)という人が書いたものがある。これを見ると、砂金のことなどは書いていない。磯のものは三月三日の外は、村の者は取ることがかなわない。同大明神の神体を、昔取り上げたところは、命婦

瀬といっている。その取り上げた者が命婦になったから命婦瀬といっている。この他にこの書物が伝えているところは、三月三日の祭事のことと、霊験あらたかだということ、神体を見た者が、非常にまがまがしい目にあって、それで命を落としたりしているということが書かれてある。ともかく何かが海から寄り付いた、寄り神の一つで、やはり石ではないかと思うが、そういう石の中で特殊な金塊のようなものがこういうところに祀られている。

琴崎明神は先程のシマ様とは違って、広く地縁の人、琴に住んでいる人の中心となって斎かれている。これがもし中央で上代に起こった事実ならば、かなり古神道的と言うか、中央の神道を形づくった神の物語に近い。それが百何十年というのはもう少し遡るのだろうが、二、三百年昔の話である。現実に信じられているというところに価値を感じた。

琴より北に位置して西泊という村がある。そこに花宮御前という社が記録されている。昔は西泊の少し北に三宇田村があったのだが、今は廃村になって西泊村になっている。『対州神社誌』によると、三宇田村とあって、箇条書きになっている。

一　花宮御前　神躰石高六寸。勧請不知。
一　社鳥居無之。
一　神南向。村より東ニ當ル。神所と村之間三町程也。
一　神山麥六舛蒔程。椎木其外雑木有。
一　祭禮之儀、毎年六月ニ入吉日次第。比田勝村法者藤右衛門罷越勤之。村人方より御三寸花米少出之。神楽仕ル。

『大小神社帳』になると、「祭神木花開耶姫神」というふうに例の翻訳化が行なわれている。『対馬州神社大帳』には

「神體石」というふうにある。それから『楽郊紀聞』では、

西泊村に花宮御前といふ神社有。いか成神共知れず。さまでもなき社なり。定めて其辺に花の咲木など多かりし故に、かくは名を付しなるべし。

とあって、あまり問題にされていないようである。ただ花宮御前という名前にひかれるところがあって、尋ねてみた。永留久恵さんという方が、雑誌「日本民俗学」の百二十五号、昭和五十四年十月に「対馬における蛇神の伝説」という論文を発表している。その中に次のような記載がある。

最近……西泊の人たちから聞いた話では花宮御前は船に乗って流れて来た姫君で多くの財宝を所持していたが、土地の者に殺され、所持品一切を奪われて、この地に埋められたのだという。

ところで、この種の話は対馬では基本的な伝説の一つになっている。たとえば樽浜から仁位に行く船で船員に聞いたのだが、対馬では西海岸に遺体が随分と漂着する。韓国人のものが多い。それを海岸に埋める。うつぼ舟の伝説をもつのは海賊の家に多い。これは事実ではないだろうが、韓国では第一子の女の子は、うつぼ舟に入れて流す。すると幸福になると彼等は信じている。ということを信じている日本人の方が誤解しているので、そこのところはご承知願いたい。うつぼ船の中には財宝などがはいっていて、金糸で織った蚊帳などがある。財宝としての蚊帳の話は佐渡が島でまた聞くことになるのだが、ともかく、畳むと非常に小さくなるという蚊帳が、非常な宝物なのである。それで、鴻池の者は、その女の子を殺して、持っているものを奪ってそれをもとでに大儲けした。そんなところまで話が進展してゆく。この種の話が非常に多くあるのである。

五月二十二日に、西泊で、そこの住人たちに花宮御前について聞いてみたのだが、あまりはかばかしくなかった。つまりうつぼ舟で漂着し殺された話を誰でも知っていると思って聞いてみたのだが知らないようであった。

「花宮御前は三宇田のことだ。場所の名だ。そこに行くことをビシャ御前に行くといった。鮫が多くて磯仕事をしていてさらわれたという話を聞いたことがある」。

これではあまりたいした採集ではないが、ただ少し気になったのは、ビシャ御前ということばである。

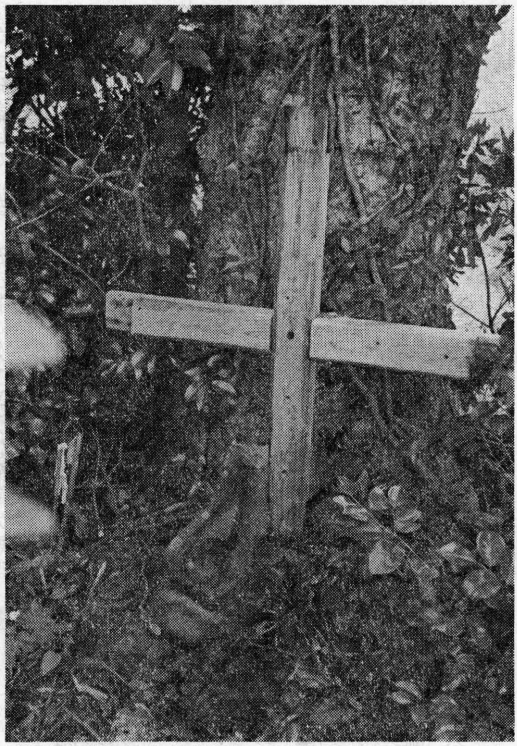

写真3

三宇田は言われた通り廃村であって、今海水浴場の施設があるだけである。この海水浴場に行くのにかなり急な崖があって、そこはずっと木が覆っているのだが、よく探すと、くぼみの穴のある三十センチばかりの石があって、その前に木で作った十字架が立てかけられている(写真3)。傍らに、錆びた看板があって、それに説明が書いてあった。およそ次のようである。

徳川時代の初期、黒田藩主の側室で、花宮というのがいた。花宮はキリシタンを信仰し追放された。玄界灘を逃れて

いるうちに、海上で時化にあい、この浜に打ち上げられた。村人はこれを助けた。花宮は城中に残してきた愛児を思って歌を歌った。村人に病人が出ると、マリア様を唱えて、治癒させた。人々は花宮をマリア観音と慕った。今に花宮御前の石塚がある。というようなことを伝えているのである。

花宮御前の口碑をこういうふうに並べてみると、伝説というのは変化するものであるということになる。伝説は物について語られる。その物について語っている人は、それを信仰の上の真実として語るのだが、この語る部分、言語伝承の部分は、本来は不要である。つまり石なら石に対する信仰があって、それでもう十分なのであり、そこに中心があって、その石の霊力についての語りはあとからついてくる。その石を斎く人が変わると、語られる内容が変化してしまうのである。これは花宮御前を例にとると、たとえば対馬には乙宮御前という場所・社を十八例拾うことが出来る。どういう神か詳しいことは分からないが、ある所では、ワタツミノ宮の乙姫だといっている。またある所では恵美須だといっている。ともかく海の向こうから漂着した神らしくて、それが乙宮御前という女性の名で呼ばれている。すると花宮御前は乙宮御前からの分派、あるいは習合と考えられる。

またこれも半分伝説化しているのだが、対馬の国主の宗義智の夫人は小西行長の娘であったが、キリシタンであったため、行長が誅せられた後に、その禍が家に及ぶのを恐れて慶長六年(一六〇一)夫人を長崎に送った。夫人はその地で没したが、それからのち祟りがあって、国府八幡宮の今宮神社に祀ってあるのは、このキリシタンであった夫人である。その夫人の子は若宮神である、というふうな伝えになっている。するとそういう知識を少し持っている者が、花宮御前なら花宮御前を斎くと、すぐに伝説を、自分の知っていることによせていく。神憑りしても知らないことは言えないのであって、神憑りして自分の知っている話に置き換えられていくのではないかと考えるのである。種々の話の混同

が見られると思う。

三　石積みと埋め墓と

今まで取り上げたのは単独の石についての信仰・伝説であったが、石が積み上げられているもの、あるいは石を積み上げるという行事が、対馬には見られる。峰町の青海というところは石積みのヤクマが残っているところだが、記録は寄神神社に関するものばかりである。同じ土地におこったことだから、どこかで関係があるかも知れない。寄神神社は『対州神社誌』では「神體石」、『大小神社帳』には「祭神西沖ヨリ来ル」とある。この青海というところは、仁位の平山家の所領で、天明四年に平山東山が著した「平山伝記」という書物がある。それによると、神社は応安年中に建立された。その当時の当主だった国広という者が、夢で神のお告げを聞いて、自分を祀ったらば加護する、明日の朝浜に行けと言われた。海岸に出て行くと、大きな石が二つ海に浮かんでやって来た。それで、扇を広げて、もし神ならこの扇の上に乗れと言ったら、即座に乗った。それでその地に祀った。これが寄神社であると記している。大きな石が扇に乗るという不思議は普通の理解を越えるが、軽石という例もあるので、開いて見ないと神体の得体は分からない。

寄神神社の辺りに行くと、磯にたくさん漂着物が流れ寄っているが、そのほとんどがハングル文字の書かれている物である。洗剤の空缶だとか、自転車のサドルだとか、そういったものが勝手に流れついているのだが、朝鮮のものがほとんどであった。そういうところである。

この海岸に石積みがある。それをヤクマとか、ヤクマトウとか言っている(写真4)。村の人たちの話を聞くと、「旧暦六月初午の日に村中で積み上げる。男の子が欲しい人が積む。そうでない人も積む。長男がヤクマをする。積んでお酒を

写真4

掛ける。ヤクマトウには神様がいらっしゃる。」という具合で、神様がいらっしゃることだけは強調するが、村には老人ばかりで、定かでない。

青海の村を見て気になったのは、盛んに墓地の改築工事をしていたことである。

青海とその隣の村の木坂とのヤクマについては、鈴木正崇氏が「日本民俗学」の百四十号、昭和五十七年三月に「対馬木坂の祭祀と村落空間」という論文を書いていて、それにかなり要領よくまとめておられる。木坂で海神社の宮司に聞いたところと合わせると、

木坂の方では、天道社祭りともいっている。六月の初午に海からやって来たマサゴ石を積み上げる。長男は二回、ただし連続は不可。次男は一回。木坂、青海より数名の当番が出て、それが中心になって村の男たちが手伝い、積み上げる。女はこの時参加してはいけない。昔は通行することも避けられた。特別な神饌を捧げ、おさがりは男のみで共食する。

だいたいこのようにまとめられると思う。マサゴということばが、ここでも出て来て注意される。

そして、ヤクマは厄午だといっているが、どうもそうではなさそうである。ヤククマが厄午であるというのでは、ヤクマは何も塔ふうの積み石だけではなくて、川の淵の特定の岩のこともヤクマといっているところもある。仁位だと初午とは限らないのであって、丑の日の行事であるところもあり、二十五日に行なうというところもある。どうして行なうかということも、馬を供養するためだ、これはヤクウマから来た解釈だろう。それから、これがだいたい当たっていると思うのだが、対馬は平地が少ないために、田圃がほとんどない。穀物は麦が中心で、お祭りというと麦で酒を作り、麦中心の生活をしていた。それで、麦の収穫祭がヤクマの祭りだろうとだいたい解釈されている。それとともに、たとえば阿連では、盆踊りの一行がヤクマという崖のところでは必ず踊るという、盆踊りの対象の場所になっている。

石積みのヤクマは木坂にもあるが、採集した前日に嵐があって、木坂の方のヤクマは崩れてなくなっていた。

ところで、青海もそうだが、隣の木坂は、両墓制が後まで残ったところである。両墓制は佐護の湊というところも後まで残っていた。『楽郊紀聞』によると、「青海村は人死すれば海べたの石原に葬る」とあって、そこは川尻にある一定の狭い区域だったらしいが、ごろごろした石の地で、深く掘ることが出来ない。少し掘ると古い骨が出て来る。けれども、けがれとも悲しいとも思わない。そこにまた新しい死体を埋めてしまう。少しの囲みはあるけれども、波のひどい時には波をかぶるような、そういうところに埋めてしまう。こういうようなことを報告している。『楽郊紀聞』の著者は士分の人であるから、そういうようなことを軽蔑したように、江戸時代の書き方で書いているけれども、言っていることは事実である。

お寺には家々の場所があって、五輪塔ほどの石塔を作っている。盆、彼岸、年忌もそこを拝む。だから埋めたところ

は一切これを拝むことはない、と言っている。『津島記事』に載る「平山伝記」では、平山の家は他とは区別した墓を持っていたようだが、百姓などは雑葬と書いてある。つまり家々によって埋める場所も何もなく、死んだ順に埋めてしまうらしいのである。鈴木栄三氏の昭和初期の報告だと、月の始めに死んだものが、村に近いところで、だんだんに遠いところに埋めていくと報告されている。その埋め墓とは別に、寺にはカラムショというのがある。川辺の川尻をエジリと称して、そこのところが埋葬の地で、石に囲まれてはあるけれど、小さい石で単に囲っただけのものである。九学会連合対馬共同調査委員会の昭和二十九年刊『対馬の自然と文化』の「葬制」の中で井之口章次氏は、干潮の時を見計らって磯づたいに青海にはいられたらしいが、次のように報告されている。

今にも浪をかぶりそうなところに、死体を埋めるワボがあり、……元は死体をここに石こずみにして、埋葬後一切省みなかった。木坂では……やはり石こずみにして死体を埋めた。三、四〇年位前までは、付近を通ると死臭が甚しかったという。

別の機会であったが、七月十七日に、瀬戸内海では唯一両墓制が残っている佐柳島という島に行った。村から行って、手前のところに拝み墓があり、奥の方に埋め墓があった。そこもやはり石ころだらけの島で、埋め墓は石を積んだだけのものであった。話が別のことになるので、これはこの辺にしておく。

更にもっと大がかりな石積みは、豆酸の八丁角というところと、佐護の湊に、天道法師の縁の石積みがある。この天道法師というのは、『対州神社誌』によると、対馬の豆酸内院の照日之某という長者の一人娘が、天智天皇の白鳳十三年に日輪の光を感じて懐妊して男の子を生んだ。長じて後に僧になり、巫祝の術を得て天道法師と名告る。朱鳥六年十

一月十五日に、上洛して、大宝三年に一度帰国する。霊亀二年、天道法師三十三歳の時に元正天皇が不予になり、天道法師は内院より壱岐に飛び、そこから筑前の国の宝満獄に飛び、そして都に上る。そして天皇の御悩を平癒する。種々の褒美を授かるが、帰途に行基菩薩を伴って帰国した。行基の作った仏が六体あるということも記している。後に天道は卒土山、八丁の間穢れをゆるさずというので、これを八丁角と称しているが、そこで入定した。その後、佐護の湊山に菩薩となって出現した。このようなことを伝えている。天道の母親については異説があって、元禄二年の『天道法師縁起』では、その母は内院の女御の賤婢なり、とある。また土地の伝えでは母は内院の女御で、宮中で不義を犯し、懐妊をしたままうつぼ舟で流され豆酘に漂着したという。結局この形がわりに古くて、これがいろんな伝説になっているのだと思う。そして『対馬州神社大帳』ではこの入定の地を、

以其廻八町、為神籬磐坂。
又云神籬磐坂、云天道地也。

などと記している。つまり、神籬磐坂といったような解釈が、ここで加わってくるのである。

ただ実際に行って見ると、天道法師の墓だという石積みは、決して墓の形をしていない(写真5)。私見のみではなく、多くの先学が、墓の形ではないとしている。

それで、カラムショといわれている拝み墓が、今はあるのだけれども、それがなかった時代を想定してみることが出来ると思う。案外それはそう昔のことではない。大名の宗家からして、墓所の明確になるのは八代貞盛からで、およそ室町時代中期にあたる。そういう状態を考えてみると、石に埋められた雑居している葬り所があって、一方神が寄り来

写真5

る場所としての石積みがある、そういうことになろうかと思う。ヤクマにはどうも神がいるというふうに現在でも信じてられている。あるいは阿連では石積みではなく、崖みたいなところであったけれども、盆踊りの対象の場所になっている。すると、ヤクマはある時代神が寄り来る場所であったものが、その神に祖霊を感じてくるというのも不思議ではないのではないかと思う。

では、そういう石積みというのは何なのかということになる。それは神籬、磐坂であるというと宮廷神道の方にはいっていくから、速断することが出来ないが、ともかく何か霊魂の集中場所として、そういう石積みが築かれていた。その形骸ではないかという推測がなされるのである。折口信夫の『神道概論』では、

大伴の　遠つ神祖の　於久都奇は　著く標立て　人の知るべく（万葉集巻十八・四〇九六　大伴家持）

などという歌の解釈で、「於久都奇」に大伴氏代々の骨が入

っていたとはとうてい考えられないと言っている。やはり大伴氏の祖霊・職業霊が籠もっている場所であるということをなんとか証明しようというふうに、傾いておいでになることがうかがえるのである。

四　海神と山神

最後に、海と山との関係であるが、壱岐の筒城仲触にある海神社の背後にある山が、海神山であるというような例は、端的に、海神が山を依り場所としていることを示していよう。

あるいは対馬の安神では、嶽の神祭り、または山の神祭りと言われている祭りが行われている。平間善次郎氏から聞いた話では、次のような次第である。祭日は旧暦の十一月十六日で隔年である。前日厳原から来た神職が木根神社で祝詞をあげる。祭事に直接関係する者は七名であり、当日の朝、海に出てみそぎをする。それ以前に、祭事奉仕者は三度の籤で決める。年令、家柄に関係なく籤の順で早い方から上位となる。七名の者は、鹿の皮の羽織と裁着袴とを着用する。神官と三名のみが山頂に行く。山は木根神社の山である。御幣と赤飯とオクマ(お米のこと)、酒を持って行き、山頂で神主が神饌を献じ祝詞をあげてから上席より順次酒を飲み、赤飯を食べる。四人は中腹で、とがずに米一升、水一升でご飯を炊き、鰤を串ざしにして待っている。醤油も塩も持参しない。山頂の者は祭事を終えて中腹に下って来る。山頂の者は赤飯と酒とを残しておく。中腹の者は鰤とご飯で饗する。つまり、そこで共食が行なわれる。それから神職と七名とが下って来ると、川原(安神には川が一つしかないから、川原で通じる)に男子だけが集まっていて、用意していた鍋で煮たものと酒で共食する。山に行った七名は、最後にまた木根神社に行って、そこで酒をいただいて祭りを閉じるということである。祭事奉仕者にはそういう意識はないようであるが、ともかく海に寄り付いた石のところを

出発点にして、隔年毎に鹿の皮を着た者が山に登って行き、神祭りするということになる。どうして鹿の皮を着るかについては伝誦はないが、応神十三年紀の日向諸県君牛の一族が鹿皮を着て賀古の港に漂着した話が思い起こされるところである。

仁位の和多都美神社は格式の高い神社であるが、その前の海に面して、磯良恵比須と称される亀裂のはいった岩がある。安曇磯良の墓とも御神体とも考えられている。平山静麿氏(七十九歳)から聞いた話は次のようであった。磯良恵比須は元は渚にあってもっと姿を出していた。社殿以前はここが祭場であった。宮司は代々長岡氏がつとめ、命婦は山上氏がつとめたが、国分氏が命婦の田畠をゆずりうけて、今に命婦舞を伝承している。旧八月一日の大祭に長岡の当主が祝詞を上げ、国分氏の男子が磯良舞を、女子が命婦舞をまう。長岡氏は安曇の磯良の子孫で、百代以上もつづき、三代前までは、確かに印の鱗が三枚肩についていた。平岡の家は長岡の分れで、自分は昭和四年から十年間、また現在も宮司をつとめている。祭事には、安曇連平岡静麿と名告る。

旧暦十一月の初酉の日には、大岳祭りが行なわれる。長岡の当主が大岳に登り帰って来るまで、村人は音を立てないで静寂を守っている。碓なんかもつかない。常には大岳の山頂までは誰も行かない。年二回、昔は村人が道を作った。山頂の祠で当主が祝詞をあげて帰って来るのだろうが、自分は長岡の当主ではないからそれには預かったことがない。大岳というのは七岳の一つで、そのおおもとである。自分の家は、天神山を守っている。それは天道岳ともいっている。九月十六日に、自分はその神様を祀るために山に行く。そこには和多都美ノ御子神社があり、後に菅原道真を合祀した。

この話を簡単にすれば、海神の子孫が大岳という山に上り神祭を行うこと。また天神山にはワタツミノミコ神が祀っ

てあるということになる。

更に多くの類例を集めなければ、何とも結論は出せないが、池田先生の「海神山神論」は、海神と山神の論ではなく、海神イコール山神論となったのではないかと、今は考えている次第である。

参考文献

「対州神社誌」『対馬の神道』鈴木棠三、昭和四十七年刊、三一書房、所載。なお「対馬国大小神社帳」「対馬州神社大帳」はその「注」にあるものを使用した。
『楽郊紀聞』1・2　鈴木棠三校注、昭和五十二年刊、東洋文庫。
『津島紀事』上・中・下　鈴木棠三編、昭和四十七・八年刊、東京堂出版。
『壱岐名勝図誌』上・中・下　昭和五十年刊、名著出版。